医療ルネサンス　№8360　アルツハイマー病新薬　3/6

軽度の人 支え合う場

「気楽な仲間と大笑いできるのはすごくいい。楽しく過ごさないとね」

熊本県の男性(76)は月に1度、熊本市のNPO法人「認知症予防・生きかた支援センター（愛称・ハルカゼ）」が提供する集いの場「ハルカフェ」に夫婦で参加している。ここでは認知症の手前の段階にあたる軽度認知障害(MCI)の人やその家族を専門家が支援し、当事者同士で支え合うピアサポートを導入している。

男性は2020年頃、人や物の名前が出にくくなったと自覚し始めた。頭の中がもやもやし、言葉を組み立てて伝えるのに時間がかかる。みつぐまち診療所(熊本市)で21年10月にアルツハイマー病によるMCIと診断され、今年8月から県内の病院で新薬・レカネマブの治療を受ける。

手指の体操をする「ハルカフェ」の参加者ら（9月、熊本市で）＝NPO法人ハルカゼ提供

果樹栽培の農作業を続けながらも、男性は周囲に病気を明かしていない。ハルカフェは夫婦が気兼ねなく過ごせるかけがえのない場だ。

レカネマブの登場によりMCIの人たちにも治療対象が広がり、早期受診が呼び掛けられている。だが、MCIの段階では介護保険などの公的支援は利用できず、当事者や家族は孤立しがちだ。ハルカゼを17年に開設した同診療所院長の津野田尚子さんは、認知症発症前の早期からの介入が必要と考え、当事者や家族の診断後の支援に力を注いできた。

MCIの人は自尊心や自信を失いがちで、家族も今後待ち受ける介護への不安を抱える。津野田さんがその後、ハルカフェをスタートさせたのは、個別の相談支援では出来ることに限りがあると考えたからだ。「共通の悩みを抱える人が集まり安心して過ごせる場で、社会性や自尊心を回復してほしい」と言う。

ハルカフェは男女のグループ別に開かれる。MCIの人が男性ならば、作業療法士らとテレビゲームを使ったボウリング大会やカラオケで盛り上がる。熊本城や工場見学などに出かけることもある。一方、付き添う妻らはこの間、女子会を楽しむ。ドラマやアイドルの話題に夫の症状の相談が織り交ぜられることもある。

「私たちはまだ介護者じゃないけれど、将来夫の介護が必要になってもこのメンバーとなら頑張れる」と言う人もいる。男性とともに22年から参加してきた妻(72)も「夫の病気を打ち明けられる仲間はここにしかいない。愚痴や病気の心配、悩みも語り、毎回すっきりして帰ります」と話す。

津野田さんは、新薬が従来の認知症治療を大きく変えたと評価した上で、「診断後に、仲間や医療者がそばで支えることで笑顔で誇らしく生きてもらいたい」と強調する。

くらし　家庭

ようやく秋冬物に袖を通すのが楽しい季節になってきの

出の機会が増えるとともに、ラメなど光沢のある素材が人

オールインワンに「シアーラメニット」を合わせて優美な雰囲気に

の詩